

カエルとくらして

山内祥子

# 目

# 次

|                          |    |
|--------------------------|----|
| はじめに .....               | 3  |
| 1. アマガエルとの暮らしの中で .....   | 4  |
| (1) アマガエルとの出会い .....     | 4  |
| (2) 初めての冬 .....          | 9  |
| (3) 友を得て .....           | 11 |
| (4) 旅立ちのために .....        | 13 |
| (5) 凍結にもめげず .....        | 14 |
| (6) カエルの脱皮 .....         | 16 |
| (7) 神秘的なアマガエル .....      | 17 |
| (8) 屋外のカエル達 .....        | 20 |
| 2. クロちゃん物語 .....         | 23 |
| (1) 出 会 い .....          | 24 |
| (2) 町でも求められないもの .....    | 25 |
| (3) 新生活への始まり .....       | 26 |
| (4) 飼育する上でのいくつかの条件 ..... | 26 |
| (5) 環境への反応 .....         | 28 |
| (6) クロが消えた .....         | 29 |
| (7) お茶のひとつとき .....       | 29 |
| (8) 誰からの教えか .....        | 30 |
| (9) 食べ物はどんなもの .....      | 32 |
| (10) おう吐はなぜか .....       | 34 |
| (11) 脱皮の時 .....          | 35 |
| (12) 記憶力は .....          | 35 |
| (13) 爪の働き .....          | 36 |
| (14) 冬眠はどのように .....      | 37 |
| おわりに .....               | 39 |

## はじめに

雨の道を歩いている私の前を、びよんびよんと飛んでいるアマガエル。それは幼い日からの見なれた余りにもありふれた光景で、特に心に残るものではなかったのですが、ある日、ふと私の前に現れた1匹のアマガエルは、今から考えれば、それは全く不思議とまで思えるほどの出会いでありました。カエルについては、それまで全く何の関心もなく、また知ろうとする気持ちもありませんでした。身近に見ることによって、様々な発見、そして驚きがありました。

後になって飼<sup>か</sup>いはじめたヒキガエルについても同様であります。私の前に突然あのヒキガエルが現れたら、恐らく悲鳴を上げてしまったことだったろうと思います。しかし彼と出会ったのは、すでにアマガエルと暮らして10年あまり経<sup>へ</sup>ていたときで、転居したばかりの住宅の庭で、ふと出会ったのは、黒くて体長が1センチにも満たないほどの小さなもので、アマガエルとは一寸ちがうと興味深く見たのですが、現在、私の両手に乗るほどの大きなものになるとは夢にも思いませんでした。

彼等には、きびしい自然の中に生きるための賢さや、目の覚めるような素晴らしい知恵、人間を超える能力を持っていることをこの目で確かめ、大きな感動を覚えたものです。当時は、夫の勤めの関係で県内各地を転居していた私共でしたが、我が家に落ち着くことができた現在、ささやかながらも農業にたずさわるようになった中で、農薬を使わない我が家では、野菜につく虫を捕ってはカエルに与えているうちに、彼等が農業をする者にとって欠くことのできない重要な存在であることに気が付き始めました。1匹の食べる虫の数は相当なものです。例えば、一つのキャベツにアマガエルが1匹おれば、昼夜を問わず、私共にとっては素晴らしい協力者であることがわかったのです。ヒキガエルはもちろんですが、彼等はまた、私たちが知らないだけで、様々な害虫を食べてくれ、人間は彼等に守

られているのだとさえ思えます。家に住み着いたヒキガエルを、とても大事にしているところもあるという話を聞いたことがあります。水槽すいそうの中にいる彼等を通して、大きな自然との関わりを私なりに考えさせられるようになってまいりました。彼等との付き合いもいつの間にか20数年、私のささやかな体験を通してとらえたありのままと、多少の憶測おくそくをも加えてこの一文をまとめました。

## 1. アマガエルとの暮らしの中で

### (1) アマガエルとの出会い

#### ■ 1 年目（昭和45年：松本在住の頃）

夫が飯田より松本へ転勤てんきんになり、畑と田んぼの中の一角にある公営住宅に転居したのは、昭和45年のことでした。

初夏の頃、洗面所にいつの間にやら1匹のアマガエルを見るようになりました。ピョンピョン跳びはねるわけでもなく、いつも静かに流しへりの縁にうずくまっていました。涼風が入るように少し開いていた小窓から入ったのでしょうか、小窓の向こうには広い畑が続いているのに、何が気に入ってそこにいるのか、私には少しも理解できませんでした。家族の者が出入りし、その続きには風呂場もある、決して静かな場所ではないのに、最初から全く逃げようとする気配のない様子に、私は可愛さを感じずようになっていました。そうこうして、特に変わったこともなく初秋の風が吹き始めた頃、いつの間にやらその姿は見えなくなっていました。

#### ■ 2 年目（昭和46年）

ところがその翌年の同じ初夏の頃のことです。夕食の用意に台所の戸を開けて外に出ようとしたとたんに、待ち構かまえていたかのように1匹のアマガエルが飛び込んできました。驚いてよく見ると、昨年洗面所で見ていた

のに似ているような気がしたのです。すっかり忘れかけていた記憶<sup>きおく</sup>が、また私の頭の中を廻り出しました。台所の戸は洗面所と同じ方角にあります。「もしかしたら、ここを覚えていてくれたのでは……」。色は灰色、背中に少し模様<sup>もよう</sup>がありました。アマガエルといっても、あの絵にあるような緑の美しさはどこにもありません。体の大きさといい、色といい、昨年来ていたのにそっくりだったのです。カエルに余りさわったことのない私でしたが、私の手から逃げようとしないうあたり、この闖入者<sup>ちんにゆうしや</sup>はどうしても昨年と同じものとしか思えませんでした。そこで私は手の上へのせて、昨年好んで暮らした洗面所へ連れて行きました。住みにくければ、また好きな所へ行くでしょう。私は洗面所の小窓を多めに開けておいてやりました。ところが翌日もまたその翌日も、じっとそこにうずくまっているのです。よく見ると、後方がちょっと安全な場所を選んでいるのです。その落ち着いた様子に、カエルに対する私の先入観<sup>せんじゅく</sup>は徐々に変わっていきました。

私共を信頼しきっていることに対して応えてやらなければ……。「おなか为空かないだろうか」「何を食べるのだろうか」。私は手っ取り早く身近にいたハエ<sup>ようじ</sup>を楊枝の先につけて、そっと口元へ持っていきました。少しの間は何の反応もなかったのですが、私が手を引こうとした瞬間、「パクッ」と大きな口を開けたかと思うと、楊枝の先のハエは消えていました。

体の割りに何とその大きな口、緊張<sup>きんちよう</sup>と、与えたものを食べてくれた感動と喜びで、私の胸はドキドキと高鳴っていました。彼は口に入れた餌を、目を細め息を飲むようにして、しっかりと体の奥の方へ送り込んでいました。自信を得た私は、せっせと餌を運び、信頼を得ることができ気持ちが通じ合えた喜びでいっぱいになりました。

「このごろハエが少なくなっているねえ」と夫にも言われ、ますます張り合いをもってハエ捕りに励<sup>はげ</sup>む毎日となったのでした。

## ■初めて鳴く

ある日、洗面所の中から大きな鳴き声が聞こえてきました。彼がはじめ

て鳴いたのです。それから、時々気持ちよい涼風の吹く静かな日などには、鳴き声が聞かれるようになりました。廊下側のガラス戸をわずかに開けてそっとのぞくと、体の半分もあるかと思われるほどの白いのど袋をふくらめて、力一杯鳴いています。その真剣な姿と大きな声に私は打たれました。屋外での鳴き声はたびたび聞いていますが、これだけ目前で鳴く様子を見たのは初めてでした。

やがて夏も過ぎ、再び秋風が吹く季節が訪れたとき、またいつの間にかその姿は消えていました。夫や子供の帰宅を待つ比較的变化<sup>ひかくてき</sup>に乏しい<sup>とぼ</sup>毎日、転勤先のこととて知人もなく、訪れてくれる人も少ないこの暮らしの中に、1匹のアマガエルの存在は、私の心に優しさ<sup>うるお</sup>と潤いを持たせてくれました。

こんな毎日への感謝の気持ちが、「来年もまた来てほしい」という強い願いになり始めていました。それはまるで夢のような、はかない願いでありました。

### ■ 3年目の初夏（昭和47年）

松本での生活もいよいよ3年目を迎え、再び初夏が巡って来ました。私は例年にも増して洗面所の小窓をいっぱいにかけておきました。そうしたある日、また同じ場所に彼の姿を見たのです。そのときの驚きと感動、夢が現実となったことに私はこの上ない喜びを感じました。

昨年のカエルがまた来てくれた。いつまでも来てほしい。今年で3年目。でも、一体アマガエルは何年くらい生きられるものなのだろうか。ふと、そんな思いが私の中をよぎりました。毎日の彼との付き合いの中から、今年は是非友達を見つけてやりたいと思いはじめていたのです。

### ■ デブちゃんとの出会い

ある雨の日、台所の壁<sup>かべ</sup>にピッタリとくっついている1匹のアマガエルを見つけました。大きさは流しにいるカエルの半分くらい。楊枝<sup>ようじ</sup>につけたハ

エを持っていくとパクッとすばやく飲み込みます。こちらが「ハッ」と息をのむ間にもう壁<sup>かべ</sup>にはい上がっていきます。その瞬間<sup>しゆんかん</sup>をとらえて早速洗面所へつれていきましたが、到底<sup>とうてい</sup>彼のように落ち着いているものではありません。戸を全部閉め切<sup>し</sup>って放してみましたが、たちまちパッと壁に飛びつきどんどん壁にはい上がっていってしまいます。その身軽さは、まさに忍者で、背の低い私はありったけ背伸びしてもまだ届かず、しまいには1メートルの物差<sup>ものさし</sup>を持って、流し台<sup>つか</sup>にのって捕まえ、流しに連れ戻す、逃げる、戻す。仕方なく、私はお豆腐の空きパックに2匹のカエルと一緒に入れ、ビニールで覆<sup>おお</sup>って輪ゴムでとめました。ところが、すばしこい方のカエルは全身でビニールに体当たりして、すぐに飛び出してしまうのです。こんな繰り返しが続き、彼の行動に打ちのめされてしまった私はへとへとに疲れて座り込んでしまいました。

「オーイ、カエルが2匹一緒に入っているよー」翌朝洗面所へ入った夫の声。「エッ？」半信半疑<sup>はんしんはんぎ</sup>で見にいった私の目前には、2匹が仲良くケロリとパックにおさまっているのです。昨日のあの悪戦苦闘<sup>あくせんくとう</sup>は何だったのか。啞然<sup>あぜん</sup>として2匹を見つめました。だが、私はこみあげてくるおかしさを押さえることはできませんでした。どこでどう思い直したのであろうか。私を散々手こずらせたこのお転婆娘<sup>てんば</sup>が我が家で14年間生きてくれたデブちゃんとの出会いとなったのです。

こうして2匹となった洗面所の夏はにぎやか、私も餌捕りに励み、とても仲良しに見える2匹でした。

## ■土に帰ろうとしないアマガエル

そうこうしているうちに再び初秋の風が吹き始め、寒さを迎える季節になりましたが、なぜか土に帰ろうとする気配がないのです。見かねた私は、息子が以前使っていた水栽培<sup>さいばい</sup>の器をさがし出し、彼等をそこへ入れて部屋の中へ居を移しました。器の穴から出入りしてよく遊んでいましたが、このまま家に置き、近づく冬をどう過ごさせればよいのだろうかと不

安を感じていた私は、ある日、土に帰そうと無理に入れた1匹を畑へ連れ出しました。そして1メートルほど離れた横の道にしゃがんで彼の行動を見守っていました。しばらくじっとしていましたが、やがて小さな円を描いてぐるぐると一周し、<sup>ひざ</sup> <sup>あた</sup> <sup>と</sup> 辺りの様子をよくよく確かめているかに見えたが、最後に私の膝の<sup>ひざ</sup> <sup>あた</sup> <sup>と</sup> 辺りに跳びついて来たのです。喜んで土に帰るだろうことを想像していたのに。その意外な行動に驚き、感動してしまいました。そのとき私は、「家族にしよう、してもいけないことはない」と、心に決めたのです。夫や息子にこのことを話すと、「自然に帰すことが一番幸福なのでは……」といました。そのことは私にも痛いほどよくわかる。しかし、あの時、あの行動、そして我が家族を信頼しきっていた様子を考えると、手放しがたい思いが強かったのです。

幾日かして、夫が「生物の先生にお願いして買って頂いたよ」と、水槽を持ち帰ってくれました。それが現在も我が家でアマガエルの住み家となっている水槽なのであります。こうしてアマガエルを<sup>し</sup> <sup>い</sup> <sup>く</sup> 飼育するようになったのです。



写真1 アマガエルの飼育槽の中の様子（土・水・草・止まり木）



## (2) はじめての冬

大地の中に生活していたものを、この小さな器の中で飼育することについて、何の知識も持たない私は書物をあさりましたが、具体的に示されているものは何も見当たりませんでした。やや項目的ではありましたが、わずかに百科事典に示されていた内容を頼りに水槽に土を入れ、彼等が好んで住んでいた水栽培の器に<sup>しめ</sup>湿り土を入れたものを、さらに水槽内に入れました。そして、事典で見出した大切なこととして、「カエルの上面の皮膚<sup>ひふ</sup>は滑らかだが、下面は粗で多数の細孔<sup>さいこう</sup>があり、水分をこの穴から吸収し皮膚呼吸をするので、皮膚呼吸に欠くことのできない湿土<sup>しつど</sup>を必要とする」「樹上<sup>す</sup>に棲む習性を持つ」の二点を特に大切なことと思い、バックに水を入れたものを水槽内に置いたり、ミツバやユキノシタを植え、棒切れを水槽内に渡し、できるだけ自然に近い環境にしました。

これで準備が整いましたが、これからどう飼育していくか、全く未知への挑戦<sup>ちようせん</sup>が始まったのです。

一日一日と気温が下がり始め、炬燵<sup>こたつ</sup>・ストーブ・セーターなど、しまい込んであるものを次々と出して冬への準備が始まり、そしてカエル達の冬支度が始まりました。小さな後肢<sup>うしろあし</sup>を使って、巧みに両側へ土をはね上げては、お尻を左右に振って土の中へだんだんと体を埋めていきます。その足の動きの可愛らしさと巧みさには思わずみとれてしまいます。後肢だけではなく、前肢<sup>まえあし</sup>もまた巧みにくると顔のゴミなども取り除いてしまいます。また彼等の温度調節のうまさは驚くほどで、「寒いな」と思う朝、水槽をのぞくとすっぽりと土の中に入り込み、「少し暖かいな<sup>あたた</sup>」と思えば背中を半分も出している。そこでこんなに背中を出しては寒かろうと土を掛けてやっても必ずはね除けてしまい、人の手によるものでは気に入らないらしい。この小さな命が厳しい自然の中に生き抜く姿がうかがわれ、一層いじらしさを覚えるのでした。

温度が4℃、3℃と下がり始めると自然に鼓動<sup>こどう</sup>は止まり、およそ7～8

℃になると活動を始めるのですが、私の目には鼓動<sup>こどう</sup>が全く見られなくても体は動いている、このことは私の目からは理解しがたい現象の一つでした。これは低温によるホルモンの働きの低下であって、冬期は夏期の1/10位に減少するためという大内一夫先生（埼玉県三郷市在住）のご教示がありました。

ある暖かい冬の日、目覚めたカエルに一粒のご飯を与えてみました。空腹のカエルがこれを食べるだろうか？（冬眠中のカエルは、およそ半年もの間何も食べないでいるのです。）一瞬<sup>しゆん</sup>飲み込んだかに見えましたが、たちまち押し出して鼻の上に乗せたままですましています。その有様に家内中が大笑い。夫曰く「生鮮食料品しか食べないなんて、贅沢<sup>ぜいたく</sup>なものだナア」地球が眠り生物が眠る時、またカエルも眠る。地球の活動と共にカエルの活動もまた始まる。その半年に及ぶ長期間、寒さと空腹<sup>た</sup>に耐え、自然に順応<sup>すなお</sup>し調和して素直に生きている彼等なのであります。

## ■<sup>けいちつ</sup>啓蟄の日

「啓蟄の日」（3月5、6日頃）に関心を持つようになったのもこの頃からでした。カエルたちの様子からも「大分暖くなって来たようだから、そろそろ地上へ出ようかな」と、むずむずと動き始めている様子がうかがわれ、春を待つのは虫達ばかりでないことに共感を覚えたのです。

## ■カエルを失う

3月に入って間もなくのこと、暖かい日には水栽培の中から地上に出ては日向ぼっこをしたり入ったりしていたのに、1週間ほど姿を見せなくなっていました。どうしたことだろうと探すと、2匹は水栽培の器の底に寄りそうようにして動きもせずになっていたのです。1匹を手にした瞬間「もうだめなのかも」と感じました。喉の辺りが腫上がり、息苦しそうに喘<sup>あえ</sup>ぎ、呼吸<sup>こんなん</sup>困難な状態<sup>おちい</sup>に陥っていたのです。カエルは間もなく私の手の上で死んでいってしまいました。知らないでいるよりは、その直前ではあっ

でも、見つけてやる事ができたことが、何よりも自分への慰<sup>なぐさ</sup>めでした。おっとりしていて、よい声で鳴いてくれたいいカエルでした。それに何よりも我が窓を忘れずに3年間も訪れてくれたことが可愛くてたまりませんでした。私は庭の小さな木の下に埋めてやりました。「さようなら、いい思い出をありがとう」。

残ったもう1匹はと見れば、まるで元気がなく、これもまた？ ふと私の中にそんな不安がよぎったのです。それほどにすっかり元気をなくしてしまっていたのですが、どうやら日を追って元気を回復し、ほっとしたのです。考えてみれば、1週間も器の底に一緒にいたということは、病気の友に付きそっていたのではと思いが及んだとき、カエルといえども人に勝るとも劣<sup>おと</sup>らぬ情があるのだ、と私の心には何か沁<sup>し</sup>み入るものが残されたのです。

### (3) 友を得て

1匹になってしまって寂しく、夫が転勤となり長野へ転居したのもその春のことでした。水槽は運転手さんの心配りで特別に運転席の横へ置かせていただくことができ、長時間の揺れに怯<sup>おび</sup>えたようなその眼差<sup>まなざ</sup>しに、長野の宿舎に着いた直後にのぞいた水槽の中で、私はそのとき始めて出会ったのです。

1匹になってしまったカエルは、私の捕るハエをいくらでも食べてしまいます。餌を指にのせて与えると、その両手で「パタッ」としがみつки、幾度も指に吸いつき、まるで「もっと、もっと」とでもいっているようで、部屋中を追い回してやっと捕らえた1匹をいとも簡単に飲み込んでしまうのです。一寸水槽をのぞいただけで大口を開けて飛びつき、鼻を打ったりして笑わせられ、掃除をしたり洗濯物を干したりで部屋をあちこち行き来する私の方へ体を向けては待ち構<sup>かま</sup>える。その有様に「餌と思われているんじゃない？」と家族にからかわれながらも、結構楽しい毎日でした。

食欲旺盛なカエルはたちまち太り、  
かつて忍者のごとく軽々と天井を逃  
げ回っていた頃のほぼ2倍の大きさ  
となり、「デブチャン」と命名した  
ゆえん  
所以であります。

その年の6月、所要で飯田に帰宅  
の折、我が家のミツバの中でまばゆ  
いばかりの緑のアマガエルを見つ  
け、思わず我が手にしてしまったの  
が、昭和48年6月から平成元年1月  
17日まで、足かけ17年間も水槽で暮  
した「ナキムシ君」でした。私が台  
所で「トントン」とたてる、まな板  
などの音に合わせて良い声で鳴いた  
ので、そう付けられました。そのと  
き、缶詰の空き缶に入れ、私の手荷物と一緒に5時間近く列車に揺られて  
長野へやって来たのでした。デブチャンほどに活発でなく、ユキノシタの  
葉陰や水を汲んであるパックの下にひそかに身を寄せている温和おとなしい性格  
でした。

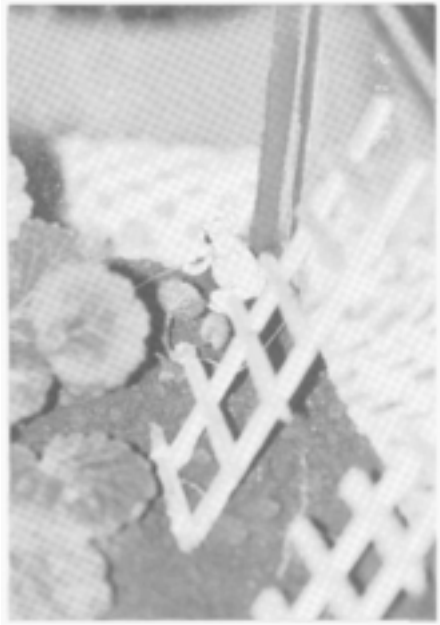


写真2 水槽の中のアマガエル



写真3

水槽の中で楽しむアマガエル

#### (4) 旅立ちのために

55年6月、所要で1週間ほど帰飯したことがありました。勿論夫は夜になれば帰宅するのですが、彼等を置いていかなければならない、気になる1週間でありました。仮に彼等が水槽から飛び出したとしても乾燥を防げるように、その周囲へ台所の器を動員して水を汲んで置いたのです。空腹より何より彼等にとって乾燥が大敵なのです。夫の職場は、帰宅時間の予測はできないけれど、留守中の彼等の様子は夫に連絡してもらうよう頼んで出かけたので、特に変わったこともなかったようで、一応安心して帰ったのですが、帰宅直後に彼等の様子を見たとき、その表情から何かとても「やり切れなさ」「たまらなさ」を感じ取った私だったのです。水槽のガラスは、彼等が上り下りした泥んこの足跡で汚れ、カエルたちの目には落ち着きが見られませんでした。飯田からのおみやげの好物のハエも喜んで食べていられないほどに、日頃のおっとりした様子を失ってしまっていることがありありとうかがえ、置き去りにしたことを悔いたのです。

飯田の家の増築を始めた7月末より8月半ば頃まで、再び帰飯しなければならないことになり、今度は彼等を連れて帰らなければと思ったのですが、しかし、どのようにつれて帰るかが問題で、夫とも相談してカエル達にとってよりよい方法を考えました。

長野の住宅の近くに川魚屋さんがあり、買い物の帰りなどにそのお店の前を通ると、釣り具・網・籠<sup>あみ かご</sup>など珍しい道具が並んでいます。大きな水槽には、いつもヤマメなどの魚が元気よく涼しげに泳いでいます。夏休みを控えたある日、お店の前を通りかかった私の目に写ったのは、青色のビニールの紐につるされた、やはり緑色のこまかい金網でできたきれいな虫籠でした。「そうだ、あれに入れて帰ったら……」と思いつき、早速それを買って求めたのです。帰宅した夫にそれを見てもらうと、眼鏡を外してよくよく手に取って見ていたその表情は余り芳<sup>かんば</sup>しくはありませんでした。自分ながら良い思いつきと思ったのに。

「小さな軟<sup>やわ</sup>らかい手足の先が金網にからんでしまうとナア……」小さなその指先をいためてしまってはまずいと、氣遣<sup>きづか</sup>っているのです。いわれて見ればそんな懸念<sup>けんねん</sup>がないでもない材料が使われています。そこで次の日曜日、二人で出かけて何種類か並ぶ中から、黄色のビニール製で目もあらく手足に安全性のあると思われるものを選ぶことができたのでした。

長野から飯田への長時間、身体の乾燥を防ぐため、虫籠の底へは水を十分含ませたガーゼを敷き、前夜から慣<sup>な</sup>らすため、水槽から移して入れて置きました。環境の変化に「さあ大変」とばかりにビニールの間へ前肢を突っ込んだり、鼻で押して出ようとする、幾度となくそんな作業を繰り返しているのを見ましたが、翌朝は何とまあ、揃って鼻の頭を真っ黒にし、諦めたのか、すっかり落ち着きを見せていました。

「タバコを吸う人のそばへ座るなよ」煙草を吸わない夫は車中での空気の汚れを気にし、こんな言葉を背に私は紙袋の中の荷物の上へそっと虫籠をのせ、車中では、幸い窓際へ座ることができたので、肘掛<sup>ひじか</sup>けの上へ置くと丁度<sup>ちやうど</sup>車体との間にはさまり、より安定して、車内の扇風機の風にいとも心地よさそうに行儀よく前肢をちゃんと重ねて座ったまま。虫籠の黄色に似た薄黄色のアマガエルになりながら、我が家へと向かったのでした。

## (5) 凍結にもめげず

日本海気候の影響のある長野市の冬は、降雪は多いけれど郷里の飯田市山本より暖かいことに気をよくし、水槽をいつも日当たりのよい南側のガラス戸のある廊下へ置いたのですが、ある朝突然の寒波に見舞われたことがありました。紫色に変化してしまった身体を地上に出したままカチカチに凍結してしまっていたのです。「しまった」私は驚きあわててしまいました。うっかりしていたことを悔いしましたがもう後の祭。その様子からは、とても生き返れるものとは思われませんでした。が、私は諦めきれず手へのせて暖め、お腹をしばらく太陽の光に当てていると、何となく喉の

辺りが少し動いたように思われました。「おや？」と思い、なおも見つめていて、たちまちピクピクと活発に動き出し、手と足を使って上を向いていたお腹をあっという間にもとへ戻してしまい、手と太陽の暖かさで鼓動<sup>どう</sup>も一層活発に動き始めたのです。

「生きていてくれてよかった」と心からほっとすると同時に、この小さな生命のどこに驚くべき強靱<sup>きょうじん</sup>さが秘<sup>ひ</sup>められているのだろうか、カエル達のあまりにも素直すぎるほどの自然への順応性<sup>きょうたん</sup>に驚嘆<sup>きんたん</sup>し、改めて深い感慨<sup>かんがい</sup>をもって彼等を見つめ直す私でした。

## ■生命の危険な時

季節の変わり目に人は体調をくずすことがあります。私は、カエルも冬眠から覚めた頃が一番危険な時期ではないかと思います。その主な原因は、半年近い栄養不足によって、著<sup>いちじる</sup>しく体力が減退<sup>げんたい</sup>しているからだと思います。最初に雄カエルを失<sup>おす</sup>ったのも春先のことでした。冬眠から覚めたデブちゃんの右目に、白い被膜<sup>ひまく</sup>を見るようになったのも冬眠明けのことでした。見る者にも痛ましい状態であったものが、食餌<sup>しょくじ</sup>が与えられるようになると、その膜が徐々に薄れ、再び冬眠に入る頃には針の先ほどの1点を残して癒<sup>い</sup>え、また冬眠明けには被膜<sup>ひまく</sup>がかかるという繰り返しでしたが、結果的には徐々<sup>じょじょ</sup>に両眼の光りを失ってしまうという結果になってしまったのです（昭和58年7月）。私はそんな姿に一層のいとおしさを覚え「目の代わり位、いくらでもしてやるから頑張るんだよ」と励ますつもりが、かえって励まされているような付き合いが続いていたのですが、デブちゃんは失明後1年近くも頑張って、59年5月18日、死を迎える結果となったのです。

## (6) カエルの脱皮<sup>だつ び</sup>

食欲旺盛<sup>おうせい</sup>な彼等が、時として餌を与えられても見向きもしないことがあります。そういう時の皮膚<sup>ひ ふ</sup>の色は艶<sup>つや</sup>がなく、少し暗みを帯びてきます。目も閉じ、そのうちに大口を開けて（おう吐<sup>と</sup>の状態に見えるのですが）、身体を苦しうに揉<sup>も</sup>んで前肢<sup>くちもと</sup>を交互に口許<sup>くちもと</sup>へもっていき、細い透明<sup>とうめい</sup>な糸状<sup>み まちが</sup>のものを体内から引き出しているのです。しかし、これは私の見間違いで、口中の細い糸状<sup>はが</sup>のものは剥れた皮膚で、引き出すのではなく飲み込んでいたのだということが、後になってわかってきました。はじめてこの様子を見た時は、「これはもう危<sup>あぶ</sup>ないのではないか」とハラハラして見ていたのですが、そんな状態がものの数秒も続いたと思うと、たちまち体色も艶を増し、餌もペロリと平らげてしまうのでした。

生理現象なのか病気なのか。ある日水槽をのぞくと、デブちゃんが目を閉じて苦しうに身体をよじっています。あまりにもその様子を見かねて、「おなかでも痛い？」と小さな背中を撫でてやったその瞬間、「ツルツルッ」と背中から肢先までも薄皮<sup>はが</sup>が剥れてしまったのでした。すっかり驚いてしまった私。脱皮だったのです。それまで十余年間も持ち続けてきた疑問がこの一瞬にすべてが解決できたのでした。彼等は脱皮したものを残さなかったのです。昭和55年7月19日、午前中の出来事です。注意していると意外にもその回数が多く、殊に夏期は冬期に比べるとずっと多いことが解りました。デブちゃんの記録ノートから一例を上げますと、

1980年7月19日 午前中

“ 7月26日 午前中

“ 7月29日 昼頃

“ 8月1日 午後

“ 8月7日 午前中

“ 8月13日 午後



## (7) <sup>しん び</sup>神秘的なアマガエル

### ■信じられないこと

〈その①〉 両眼の光りを失ってしまったデブちゃんは、他の2匹とは別の、直径20センチほどの赤いプラスチックの丸い容器に居を移し替え、中に湿らせたガーゼを敷いて置きました。一日の大部分は容器の縁の上になりました。円とは都合のよいもので、どんなに歩いても終わりがありません。しかし、夜は容器のガーゼの上におろし、さらに全体をガーゼで覆<sup>おお</sup>っておきました。どこへも行かないだろうという思いが私の中にあったからです。その夜も、周囲をしっかりと結ばないままでおいてしまったのです。

9月4日、まだまだ残暑がきびしい長野のこと故、暑さに弱い彼等のために一番涼しいと思われる風通しのよい風呂場に置いたのです。夕食を終え、8畳の居間で夫と話しをしていたのですが、カエル達はどんな様子かと見に行くと、隣の水槽は特に変わりなし。デブちゃんに覆いをしておいたはずのガーゼの様子が少しおかしい。ガーゼを上げてみたところ、大変！「デブちゃんがないよ」。私は大声を上げてしまいました。夫も驚いて見にきました。さて、どこへ行ってしまったのだろうか。大分疲れが見えるこの住宅です。風呂場のコンクリートの割れ目も深い。風呂場への入口も風通しを考え、開けたままだったのです。廊下へ出れば玄関へも通じています。逃げようと思えばどこへでも行かれます。唯一<sup>ゆいいつ</sup>気がかりは、失明しているため、自力で生きることが困難なことは明白です。「デブちゃん。デブちゃん」と呼びながら、浴槽内や簀<sup>す</sup>の子の下、玄関へと懸命<sup>けんめい</sup>に探しましたが、行方は分かりませんでした。これまで暮した様々な思いが脳裏<sup>のうり</sup>をよぎり、不注意さが悔やまれて仕方ありませんでした。けれども、諦<sup>あきら</sup>めざるを得<sup>え</sup>ず、居間に引き返したその時、一歩先に居間に入った夫から「オヤ、デブちゃんがいるよ」との声。簞<sup>たん</sup>笥<sup>す</sup>の前にいたのは間違いなくデブちゃんなのです。「よく帰ってくれたね」私は胸が一杯になって、手の上にのせてやりました。目が見えないのに、どうしてここまで来られ

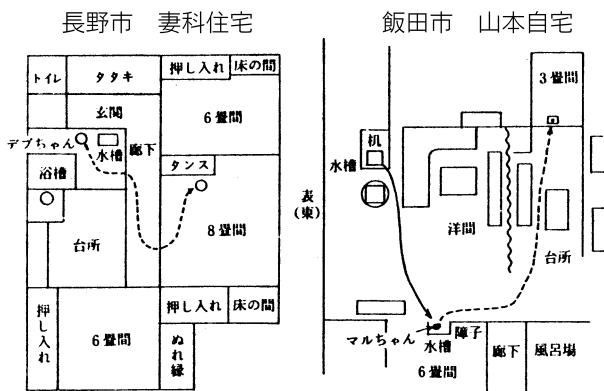


図1 カエルの歩き回った径路と住宅見取図

たのだろうか。しかし、耳は聞こえます。よい耳を持っています。

昭和45年当時は長野市三輪の教員住宅で、応接間の花瓶に挿した花の上でデブちゃんは終日暮っていて、「よく飽きないね」と感心するほどで、時々どんな様子かと見に行き、音を立てないようにそっとドアを開けるのに、すぐに敏感に覺<sup>びんかん</sup>って私のほうを向いてしまう。以来、素晴らしくよい耳を持っていることを知ったのですが。恐らく、夫と私の話し声を頼りにだんだんと近寄って来たのでしょう。言葉もなく視力もない、こんな1匹のカエルにさえ「心」がある。大きな感動を胸に残した夜でありました。

(昭和58年9月4日)

〈その②〉 飯田市の我が家に落ち着いた3年目の夏のことでした。マルちゃんにも同様の行動がありました。マルちゃんとは、長野の住宅の梅の木の下辺りに定住していたと思われる丸々とした緑色の濃いカエルに心引かれ、「マルちゃん」と名付け、水槽へ仲間入りさせたもので、昭和55年から平成2年8月上旬まで足かけ8年を飼育したアマガエルです。

東側窓際の机<sup>きじょう</sup>上においてある水槽を奥の6畳間の障子<sup>しょうじ</sup>際に移して、日中の暑さを少しでも避けてやりたいと思ったので、早速朝のうちに移しておいたものの、蓋<sup>ふた</sup>をするのを忘れてしまったのです。おとなしいナキムシ君

はずっと水槽の中にいたけれど、元気なマルちゃんの姿はそこにはなかったのです。私が気づいて探しに立った後、6 畳間から台所を通り、3 畳間の私の座布団の上にいたということがあり、いくら探しても見つからなかった9 時間ほどの間、一体どこに潜んでいたのか、未だ私には不思議な出来事として理解できかねているのです。 (昭和61年 7 月25日)

〈その③〉 夫の任地に合わせて転居を重ねていた私共は、直接生活必需品以外は段ボール箱へ入れ、積み重ねたまま。加えて息子も「これ、今使わないから」などと持ち帰り、狭い我が家はますます狭く、来客のたびに弁明も続きかねて、組立式の物置を作ることになりました。場所は東側、石垣に沿ってと着手したのが平成6 年5 月はじめのことでした。石垣の下は田んぼ。お田植えが済んだばかりの苗はさわやかな5 月の風に揺れていました。私は専ら手伝い。「金槌とって」「その釘とって」「トントントン…」「?」「カカカ…」「トントントン…」「カカ…」「お父さん、もう一度打ってみて…」私は必要以上に数回繰り返して打って貰ったのですが、確かにカエルが金槌の音に反応しているのです。人間とカエル。それは全く無関係な存在のように考えられます。しかし、私共が気付かないでいるだけで、彼等は私共人間の生活の中にいるということを感じないではいられませんでした。

〈その④〉 作家の瀬戸内 寂 聴 先生と永田洋子さん（元連合赤軍）との往復書簡集『愛と命の淵に』を読んだのは昭和61年2 月頃のことでした。先生は、京都の寂庵にいらっしゃって、信仰と作家活動をなさっておられます。永田洋子さん宛の1983年6 月16日付けのお便りの一節に「今、よく蛙が鳴きます。ここには親指の爪くらいの小さな蛙がいっぱいいます。蛙はお経をあげると合唱します。わざと木魚を早くしたりすると、あわてて早く鳴いたり遅く鳴いたりします。私がそう言っても誰も信じませんが、これがホントのホントです」と書かれています。

誰もが信じられないこと、こんな不思議なことが本当にあるのです。

(昭和62年 3 月30日)

## (8) 屋外のカエル達

### ■その① 佐久にて

最初に長野へ転居の頃（昭和48年）から体調を崩し始めていた私は、再び夫の転勤により佐久へ移ることになりました。この住宅も完成して1年有余の、田を造成した宅地で、住宅の周囲はやはり田んぼであり、又ここでも数多くのカエル達に会うことができたのです。

佐久は未知の地、わけても寒さのきびしいところであると聞かされていましたが案の定、4月だというのに何という寒さ。土地の人の話によれば、当年は例年にも増して格別であるとのこと。寒々とした枯れ草の土手に咲いていたタンポポの花の黄色がいまだに私の脳裏に残っています。心身共に疲れ切っていた私は、深夜の発作で緊急入院という破目になってしまいました。浅間おろしの風は冷たく肌にしみます。佐久の寒さを心配した夫は、屋外のタンクから灯油を室内に送り込み燃焼させる、角型の暖房機を購入してくれました。タンクの掃除用にと室内へ送り込むパイプの継ぎ目の部分に雑巾を掛けておいたのですが、その下の空間がカエル達の住いになっていたのです。雑巾を取ると急に覆いを取られて驚いた様子。でもそれ以上に驚いたのは私の方で、あわてて元の場所に雑巾を戻したのですが、彼等は逃げ出しはしませんでした。面白いことに高い部分を境にして2匹ずつ仲良く入っていたのです。

夜になり帰宅した夫にそのことを話し、見に行った時にはもう姿はなかったのですが、翌朝見ると又戻っています。時には左右の入口を違えてしまっただけの異なるものが入っている時もあるし、時には全く見かけなかった小さなものが紛れ込んでいる時もありましたが、おおよそは同一の個体が戻っているようで、微笑ましく、喧嘩らしいところは見かけたこともなく、皆仲良しであると思いました。観察の回数を重ねるうちに、彼等は周囲が薄暗くなる夕刻に餌を求めて外へ出、朝方帰ってくることがわかってきました。しかも夕刻と同じ位の明るさになると戻ることがわか

り、時計は持たないが、その目が時計のように時を見定めていることに驚きを覚えました。大方の生物が眠るその時、彼等は餌を求める。何の武器も持たない弱いカエル達は素晴らしい知恵者だったのです。

その頃また、室内の換気孔<sup>かん き こう</sup>に居を構えていた1匹がありました。昼間とてもよい声で鳴いていたので気付いたのですが、夜になると必ず姿が消え、朝方には帰るという行動をとっていました。このように決まった行動をとるカエル達は、長年生き、その知恵を身につけていると思われる「デブちゃん」タイプの大型なアマガエルに多く、その場所の安全性が確かめられると、そこに住いを定めることが大方わかったように思えました。これらのことから考えた時、かつて松本に住んでいたときに、我が窓に3年間姿を見せたカエルは同じ個体であったと考えても誤りではないと思っています。そして、佐久での生活に落ち着きを持たせてくれたのも、彼等に会えたからでは、と思っています。

## ■その② 飯田市の自宅にて

昭和59年4月から、飯田市の自宅で暮すようになりました。ここも田や畑に囲まれた家で、アマガエルやトノサマガエルの姿をたくさん見ることができます。例年のように物干し竿に2匹か3匹の緑色をした小型のアマガエルがきています。干す場所でないところならよいのですが、そうでない時は、そこは避<sup>さ</sup>けて干します。同じ場所にじっとして背にお日様の光を受けたままの姿を見ていると、その小さな体がからからに乾いてしまいはいせぬかと気になってしまいますが、夕方になるとその姿はありません。いっどこへ行き、どこから帰るのでしょうか。しっかり見届けたことはありませんでした。

ところがある夕刻のことでした。洗濯物を取り入れようとした時、竿にいたカエルが頭の向きを変えたかと思うと下りはじめたのです。頭を下に向けて、その足早なこと、あのじっとして何時<sup>いつ</sup>動くともわからない時とは打って変わったその早さに思わず見とれてしまいました。竿の前にはサカキやツツジの木があり、その下にはユキノシタやコゴミや雑草が混みあっ

ている湿地なのですが、出かけ先はそこだったのです。日陰のその場所にはいろいろな虫がいるのではないのでしょうか。日中は特に蛇などの危険を高所で<sup>さ</sup>避け、夜間に餌を求める、やはり彼等は知恵者なのであります。

我が家のカエル達は、デブちゃんは14年生き、夫に<sup>み</sup>と<sup>と</sup>看取られながら。ナキムシ君は17年生き、おとなしい彼に<sup>ふ</sup>さ<sup>わ</sup>に相応しく一人でひっそりと。マルちゃんは私の目の前で8年目に。それぞれの思い出を残して<sup>ゆ</sup>逝きました。

現在アマガエルのチビ雄（平成元年9月2日－我が家の畑より）・チビ子（平成7年6月－我が家の畑より）の2匹が健在です。



写真4 撮影をきらって隅へ逃げるチビ子



写真5 他人を警戒して隅へ逃げるアマガエル

## 2. クロちゃん物語

私の名前は「クロちゃん」、雌<sup>めす</sup>のヒキガエルであります。正式な名前はアズマヒキガエルというのだそうです。はじめにお断りしておきますが、私は天竜川流域の生まれではなく、長野<sup>すそはな</sup>の裾花川流域に生まれたものであります。しかし、天竜川の流域にも同類君たちがいると思いますので、その点どうぞよろしくお願い申し上げます。

この家の別の水槽に暮しているアマガエル君たちに比べると色が黒いので、お婆さんは、私のことをこう命名してくれたのだと思っています。「年令は15才」皆さんに聞かれるとお婆さんはそう答えますが、私もあの長野<sup>つましな</sup>の裾花川に近い妻科<sup>つましな</sup>の住宅ではじめてお婆さんと出会ってから15年目になりますので、そう思っています。

時は昭和58年5月、最初出会った時は、私はほんの箸<sup>はし</sup>の先ほどの黒い小さなものでしたが、今ではお婆さんの両手に乗るほどの大きさになっています（体長約15センチ）。

「いやだア！ これ何なの？」我が家の来客の中でも特に家のお婆さん



写真6 アズマヒキガエル（♀）クロちゃん

の友達の女性の方は私を一目見るなり「ギョッ」として、おばさんに抱きつかんばかりにして驚いてしまわれます。「あなた、何でこんなものを飼っているの？」質問というよりは詰問にも近い言葉にも、おばさんは只にここにこしているだけで「どうぞ」と奥の間へご案内致します。かくして普通の会話が始まるのであります。

生まれながらにして極めて不格好な私は、見た目可愛らしいどころか、悲鳴を上げさせてしまうほどに嫌われてしまいます。でも人様に害を与えることもないし、ひっそりと暮していて、むしろ人様に害を与えるようないろいろな虫を食べています。そのことが特に役に立っているなどとは少しも思っておりません。だってそれが私の好物なのですから。おばさんは少なくとも私のことを理解してくる一人だと思っています。そして私のことを「クロちゃん、クロちゃん」と可愛がってくれ、暖かい手へのせてくれたり、季節毎にいろいろな虫を運んで食べさせてくれます。私のもっとも信頼できる一人だと思っています。

## (1) 出会い

私共一家が、長野市西長野の住宅から旭山の麓を流れる裾花川に近い妻科の住宅へ転居したのは、昭和58年5月のことでした。夫の勤務があと1年を残すだけとなり、これまでも県内各地を十何回も転居を重ねてきた我が家にとって、同じ勤務地で転居をするというのはショッキングな出来事でした。それまで3年間住んでいた西長野の住宅は、広い敷地に4軒だけ、建物は古いとはいえ広い庭があり、塀に囲まれた贅沢な造りであるとは思っていたのですが、取り壊して寮に改築するという県の方針では致し方のないことでした。転居には再び多くの方々のお手助けを頂いて、ようやく普段の暮らしに戻ることができたのでした。

そうしたある日、洗濯物を干そうと表に出たとき、丁度竿の下になる辺りに10センチ角程の板切れが落ちていました。さほど気にもとめずにいた



のですが、その木切れの下からチョコッチョコチョコと小さな黒い虫？よく見ればカエルなのです。色は黒く、体長は1センチにも満たない、本当に箸の先ほどという表現がぴったりだったのです。それまで、十年余アマガエルと暮していた私には、その姿は異様<sup>いよう</sup>であり、ちょっと違うな、という感を持ったことは事実です。

次の日も物音に気付いてか、木切れの下から出てきます。手に乗せても落ち着いていて、逃げようとする気配はありません。現在我が家にいるクロの、この貫緑<sup>かんろく</sup>充分なカエルになる素地<sup>そぢ</sup>をすでに備<sup>そな</sup>えていたのでしょうか。

丁度日曜日、「これ見て」手の上へ乗せて夫に見せると「餌もなかなか大変だから……」私もそう思い、一旦は地上に返しました。が、翌日再び手に乗せた私は、そのままアマガエル達の仲間入りさせてしまったのです。板切れの下に住み家、なぜそこに出入りしていたのでしょうか。不思議に思った私が板を除いてその下に見たのは、蟻<sup>あり</sup>の巢穴でありました。

## (2) 町でも求められないもの

アマガエルにはハエを、チビちゃんには蟻を、町の暮らしの中では彼等への食べ物には外には何もありません。松本在住の昭和40年代から見ると、町の美化衛生への関心も高まり、ハエの数もずっと減少してきていて、悲喜<sup>ひき</sup>交々<sup>こもごも</sup>というところでした。スーパーに売っている物なら購入も可能なのですが。しかし、彼等はもっと生鮮食品でなくては受け付けてくれません。家に入れた以上、食べ物だけは確保<sup>かくほ</sup>してやらなければいけません。蟻1匹を捕まえようとしても、余りすばしこくない私などには、とても大変なことで、炎天下汗だくになってようやく捕らえた1匹もたちまちパクリと平らげてしまうのです。

### (3) 新生活への始まり

長野市妻科での1年間はあっという間に過ぎ、夫は37年間の勤務を終え、飯田市の自宅へようやく帰れる日がきました。昭和59年4月のことでした。またも引越しの準備やら自分たちの生活の大きな転換期となり、カエルがその頃どのようであったか、正直に言って余り記憶に残っていませんが、とにかく共々我が家へ帰ることができたのでした。昭和45年に新築したまま住むこともなかった家に、とに角<sup>かく</sup>荷物を配置し、未経験の農業を始めることになりました。

最小限農機具を揃え<sup>そろ</sup>、土を耕し<sup>たがや</sup>、どこへ何をどのように作り、どう育てるか、すべてが未知の状態です。芽生えたキュウリはたちまち葉が茶褐色<sup>ちやかっしよく</sup>になり、苗木を購入して植えたトマトは緑の実を大きくつけてくれ、もうそろそろと楽しみにしていたのに、色づく寸前に枯れ始め、これもまた全滅。原因不明のまま。周囲が消毒するから菌<sup>きん</sup>が皆集まってしまうのでしょうか。とにかく野菜作りを基本から勉強する必要に迫られていた矢先、農業改良普及事務所で農業講座が開かれることを知り、夫は受講することになりました。

町の暮しよりハエや蟻はずっと豊富で、クロもいつの間にかアマガエルを越えて大きくなり、夫がクロの家を作ってくれたのは私どもの生活も徐々に落ち着き始めて2年ほどしたときでした。

### (4) 飼育する上でのいくつかの条件

#### ① クロの家

\* 大きさ 縦70cm×横50cm×高さ8cm（縁<sup>へり</sup>として）この上へ凡そ20センチ高さの籠状<sup>かごじょう</sup>の網<sup>あみ</sup>を張る。

\* 土の量 春から秋までは数センチ、晩秋から冬眠中は10センチくらい（体をしっかり埋められるほどに）。冬眠中を除いて、月1回く

らい<sup>か</sup>替えてやれば理想的。

\* 水 容器に入れ、常にきれいな水を。

\* 安心できる隠れ場を

体が隠れるくらいの屋根をつける。

はじめは、ユキノシタやミツバを植え込んだのですが、後肢で根本の土をはねてはその下へ隠れようとするので、すぐに倒れてしまい、やめました。

## ②カエルと水

すべての生物は水と切り離すことはできないと思うのですが、特に私は窓の隙間<sup>すきま</sup>などから室内へ入り込んで干からびてしまった小さなカエルの姿を目にすると悲しくなってしまうのです。彼等には餌以上に必要とするものは水であるという思いを強くしています。

クロを新しい家へ移したとき、水の器の中へ体を沈めて水の場所を教えたのですが、これは愚<sup>おろ</sup>かな人間の老婆心<sup>ろうばしん</sup>であったことを知ったのはついこの頃のことでした。都会の真ん中でも、直径40センチほどの浅い鉢に水をためただけでもカエルが来るのだそうです。カエルの方が水場のありかを見つけ、アマガエルの仲間は約600メートル、トノサマガエルの仲間は約800メートル、ヒキガエルは約1,200メートルの範囲<sup>はんい</sup>から水の匂い<sup>にお</sup>を感じてやってくるという記録があるそうで、外国では庭の植物に害を与えるナメクジや毛虫など、その外いろいろな虫を食べてくれるカエルを呼ぶために、池を作ろうと池まで売っている国があるということです（園芸図鑑より）。

## ③ きれい好きです

カエルは水を飲むわけではないのですが、皮膚<sup>ひふ</sup>から水分を吸収しています。容器の水はいつも清潔にしておいてやらなければならないと思うのですが、時に随分<sup>ずいぶん</sup>ひどく汚れているときがあります。それは水の中へ糞<sup>ふん</sup>をし体を洗う

からです。見かけによらないきれい好きです。大食、そして大糞。私の指ほどの糞をします。これにはいささか圧倒されてしまいました。おしっこもなかなか大量です。

#### ④ <sup>かく</sup>隠れ場所が欲しい

クロを表へ連れ出して、時々散歩？ させるときがあります。草むらの草を分けるといろいろな虫がいて、それらをじっと見つめていては上手に舌へつけて（カメレオンのように）拾って食べています。さておながよくなくなるとどうするか。必ず草の茂みの中とか物陰<sup>ものかげ</sup>を探します。自分の体を隠すことができる安全な場所を求め、気に入ったところが見つかったら、そこにじっとしています。

### (5) 環境への反応

土の入替えのときは、箱が大きいので何時も夫の力を借ります。箱の周囲にある縁は、土の入替えのときに持ち手になり大変に役立っているのですが、土を入れ替えるたびに彼は興味ある行動をします。といいますのは、クロを戻すと必ずその縁へ上がって、周りをぐるぐると一周し、屋根からストンと落ちるように戻るのは。はじめのうちは「あ、また始まったよ」くらいに思っていたのですが、彼にとっては、これは極めて大切な行動だったのだと気付いたのは、暫く経ってからのことでした。それは環境の変化への警戒心<sup>けいがいしん</sup>の表れではないかと私は気付いたのです。「様子が変わったが危険なことはないか」「心配なことはないか」周囲をしっかりと異常ないことを確かめて帰っていたということだったのです。終日、蓋<sup>ふた</sup>などなくても、何処<sup>どこ</sup>へ行こうという意志など全くなく、たまに縁に上がったりしても戻ってしまいます。クロにとっては、最も安全な住み家なのです。「石橋<sup>たた</sup>を叩いて渡る」とはこういうことなのでしょう。

言葉は持たないけれど、鋭いまでの勘。「念には念を入れ」ともいわれ

ます。粗<sup>そ</sup>忽<sup>こつ</sup>な私は教えられました。何と利<sup>り</sup>発<sup>はつ</sup>な賢<sup>かしこ</sup>いヤツ。この知恵は一体誰から教えられるのでしょうか。

## (6) クロが消えた

クロが7～8センチの体長に成長した頃の冬眠中のことでした。それまで居場所を確認していたのですが、朝見ると姿が見えません。土の中を少し掘るなどして見ましたが、「表へ出てしまったのか」家の中のクロの巣の周辺を見てもいません。「困った」見当もつかないのです。思いついたのが埼玉県にいらっしゃるカエルに関する専門家の大内一夫先生。「そうだ、先生にお聞きして見よう」悩んだ末に「カエルがどこかへ行ってしまったのですが……」飯田のカエルがどこかへ行ってしまったことを埼玉の先生にお聞きするなんて、こんな無理な質問があるのでしょうか。ところが「大方は巣の中だと思うのですが、たとえ外へ出たとしても行動<sup>はんい</sup>範囲は狭いので、意外に近くにいますよ」。心を落ち着けて、先ず巣の中をつぶさに、着実に調べて見よう。土の中へ手を入れて端から丹念に調べていく。と、中程深くに土ではない手触り。ブクブク。まさに風船、空気がいっぱい入ったゴム風船の感触。いた！よかった。「何でこんなところへ隠れていたの」。急に冷え込んだ朝でした。いちはやく急激な冷え込みを感知したクロのとった行動だったのです。早速先生にお電話を。「ああそう、それはよかったねえ」いつに変わらぬ先生のお声。クロに先手を打たれた朝でした。

## (7) お茶のひととき

「今日はクロのところでお茶を飲むか」。農業の合間、夫と二人<sup>きゅうけい</sup>で休憩してお茶を飲む。いつも日照の様子で縁側の場所を決めるのですが、「クロも大したものだ。クロのところといわれる場所があるんだから」と夫は冗

談めいてこんなことをいいます。それほどに広くない我が家の東南向きの机上にあるクロ達の住み家は、冬期に向かうほど日当たりが良く、いわく我が家の一等地であると。

はてしなく青く高く澄んだ空。縁側にいる私達に鳥影<sup>とりかげ</sup>が落ち、夫も私もはっとしましたが、その直前で、クロの巣の中で「ガタン」という激しい音を聞いたのは。何が起こったのか。どうしたのか。のぞき込んだ私の目に、おびえ、そして恐怖に満ちたクロの姿が屋根の下にありました。かつて一度も目にしたことのない表情でした。ゆったりとしたあの貫禄十分な風格からは全く想像もできない凄<sup>ひんしょう</sup>いまでに敏捷な行動、鳥影にいち早く危険を感受する能力のすばらしさに、夫も私もあらためて深い感動に打たれた一瞬でありました。地上に影を落とし、トンビは何事もなく悠々と相も変わらず大空<sup>か</sup>を翔けていました。何十メートルの高所からでさえ地上の獲物を見付けることができるという彼等の目ざとさからも逃げなければならない。一步遅れればたちまち生命の危険にさらされてしまいます。自然界の厳しさをまざまざと見せられた一瞬でした。

## (8) 誰からの教えか

クロは蟻ばかり食べているものと思っていた私は、蟻を一所懸命に捕っては与えていたのですが、体が大きくなるにつれて、せっかくの蟻を見向きもせずに逃がしてしまうのです。そこで野菜に付く青虫などを捕って与えてみると食べます。私どもは畑の草取りや耕作をしながらも虫を入れる容器をそれぞれに持ち、一層虫捕りに張りを持つことができるようになりました。畑にはアマガエルやトノサマガエルの姿を見ることができ、我が家にもカエル達があります。夫は、野菜作りは、とにかく土作りが大切なことを学び、堆肥<sup>たいひ</sup>を中心にした有機肥料（わら・草）や菜種粕<sup>なたねかす</sup>などを利用した有機農法でやることにしました。消毒すれば害虫も死にますが、それを食べてくれるカエル達も死んでしまいます。しかし、キュウリは曲がり、

野菜の中には虫がいたりしますが、虫が食べても生きていられるのだから、人が食べても大丈夫と解釈して、安心して手作りの野菜を食べています。同時に、カエルにも安心して虫を与えています。畑から帰り、捕ってきたおみやげをクロの前に置きます。クロは置かれた虫をじっと見つめています。虫もカエルを意識してか、なかなか動きません。我慢しきれなくなった虫が一寸動いた瞬間を素早く舌につけて食べるわけです。できるだけ私は自分の手から食べさせようと思っているのですが、例えばハエを持っている場合など、離せばまってしまうし、クロが舌へつける瞬間と私が離す瞬間のタイミングが難しいと思っています。

ところで、カエルは例えどんな好物を目の前に置かれても、動かなければ絶対に食べないのです。動かない、ということは死んでいることであって、人間ならば、或いは毒物を食べているかも知れないし、痛んでいるかも知れないと一応疑ってかかるわけです。それは親からの教えや、自分の体験などを通して考えるわけですが、彼等は動かないものは決して食べません。誰から教えられたのでしょうか。ところがクロは、私が手でやれば、動かないものでも食べてくれるのです。例えば、捕らえるとき力が入りすぎて動けなくなった虫も、私の手からなら何の疑いもなく食べてしまいます。これは一体何なのでしょう。「この人のくれるものだったら大丈夫」と思ってくれるということだったら、私にとってはすごい感激です。信頼の一言に尽きます。一体誰に教えられるのでしょうか、と思いは又そこへいってしまうのです。

こんな話を聞いたことがあります。野生のライオンは子育てのとき、授乳の際子供が母親に爪など立てると、いかに我が子といえども容赦なく蹴飛ばしてしまいます。これは他人に痛い目に遭わせるな、迷惑をかけるなという教えであるといわれます。ところが人工飼育でミルクなどで育ったライオンは、そのような教えもなく育っているために、仲間へ入った場合にも、すぐに爪を出したりして他との喧嘩になり、嫌われて仲間外れにされてしまう例が多いということで、人間は勿論のこと、動物にしても子供

がある程度成長するまでは、ともに暮す中から親からのいろいろな教えや知恵を授かっているのだと思います。ところが彼等は、卵から孵<sup>かえ</sup>ったそのときから独立独歩、厳しい自然界の中で何を教えられることもなく保護されることもなく、自力で餌を求め生きていかなければなりません。クロは、小さいとき一人で蟻<sup>そば</sup>の巣の傍で生きていて私に拾われました。自己防衛、食物を選択する知恵は一体誰につけて貰ったのでしょうか。いくら考えても私には答えは出てこないのです。

## (9) 食べ物はどうなもの

イ．野菜につく虫いろいろ。青虫・イモムシなど。

ロ．地中の虫いろいろ。ミミズなど。

ハ．甲虫類（コガネムシ好物）。

ニ．蟬<sup>せみ</sup>。

ホ．京ネズミ・子ネズミ。

ヘ．コオロギ・イナゴ・バッタなど。

上記のほか、生きている虫なら何でも食べます。食べる瞬間の、今でも印象に残っている場面がありますので、二、三上げてみます。

### ① 蚕<sup>かいこ</sup>が大好き

以前には「お蚕様」と様づけで農家の家計を支えていた養蚕<sup>ようさん</sup>業でしたが、価格の低下に伴い衰退の一途を辿<sup>たど</sup>り、私の周辺でもほとんどなくなってしまいました。それでも我が家の上の畑のお宅では、4年ほど前まで大量に飼育していて、桑畑がありました。私が畑へ草取りに出たとき、土手に近いくぼみに落ちていた大きな虫を見つけました。一見イモムシかとも思いましたが、よく見れば「桑子<sup>くわこ</sup>」です。桑畑から落ちたのでしょう。クロちゃんの餌が少し不足していたこともあり、早速「はいよ」と手から与えようとしたとき、私はその目にキラリと光るものを感じたのです。きっ



とこれは好物であるに違いないと思いました。私は早速大内先生にお聞きすると、案の定、「大好きなんです。ですから近所に蚕を飼っている家があったら、繭まゆを作れない蚕を貰ってきてやって見て下さい」とのお返事。残念ながら、上の畑のお宅までは遠いし、ご近所ではすでに飼育しいくされているお家は1軒もありませんでした。

## ② 子ねずみ

5月に入って植えたサツマ芋の苗が、畝幅うねはば一杯に拡がり掘れる日を待つばかり。どんなお芋が取れるだろうか。好天の日を待ち夫と二人で掘り始めたのは9月へ入ってからのことでした。なかなか良い出来とだんだん掘り進めていくうちに、ネズミにかじられたような跡のある芋が出てきたと思ったとたんに、土の中から飛び出した親子のネズミ。驚いてあっけにとられている間に早くも逃げたのは親ネズミ。子ネズミは怖いのか土ころの陰にうずくまったまま動きもしないでいる。「お母さん、早くクロを連れてきて」「え?」とは思ったが大急ぎで連れてきて、その傍そばへ。クロが動いた瞬間「あれ?子ネズミはどこへ?」まさかあんなものを食べるとは思いもしませんでした。驚いてしまって、クロをつくづくと眺め、夫と顔を見合わしてしまいました。「おなかでも痛くしているのでは」おそろおそろ後から様子をうかがいに行くと、「お婆さん、今度は何のおやつ?」とでもいうように私を見上げる、いつもと変わらぬその黒い目に会ったとき、ようやく安堵した私でした。怖こわくて手が出ないようなものをぺろりと退治たいじしてくれたクロちゃん本当にありがとう。

## ③ 蝉も鳴きながら

平成9年夏、各地で蝉の大発生の年だったといわれましたが、杉や檜ひのきの木に囲かこまれている我が家でも、とても蝉の鳴き声で賑わいました。家の入口の橋を渡ったところの両側の檜の木2本は割合に幹が目立ち、そこに蝉が3匹も4匹も並んで鳴いている光景を何度も目にしました。離れた町に

住む息子夫婦は時々帰宅します。夏休みを終えて勤務地に向かう車が出た後、土の上に転がっている1匹の蟬を見つけました。手にとって見るとミーンミンミンと大きな声で鳴きはしましたが、もう舞い上がる力はありませんでした。6年も7年もの長い間地中にいて、ようやく地上に出て、たった何週間かのその短い生涯を終えようとしているのです。蟬ファンの方にはごめんなさい。私はこれをクロにやってみようと思ったのです。手にのせて目の前に差し出すと、モヨモヨと動く細い手足をじっと見つめていましたが、あっ！「パクリ」。<sup>のど</sup>喉を通るだろうか。ミーンミンミン（口の中の声）ミーンミンミン（喉の辺り）ミーンミンミン（おなかの中）。それぞれの場所に鳴き声を残しつつ、私の心配をよそに、しっかりとクロの体内へ流れるように収まってしまったのでした。この有様を目前でじっと見つめていた私は、<sup>あふ</sup>溢れる涙をどうすることもできませんでした。悲しみとも笑いとも、自分でも判断できない<sup>ふくざつ</sup>複雑な思いだったのです。何事もなかったように表情一つ変えないクロちゃん。お前は何という<sup>すご</sup>凄いヤツ。お前のおなかは一体どうなっているの？　ますます不思議さを増すばかりの私なのでした。

## (10) おう吐はなぜか

これまで長い間、病気らしい様子を見たことがなかっただけに、突然苦しそうに黄色がかった水をおう吐<sup>と</sup>しているところに出くわした私は、すっかりうろたえてしまいました。平成7年5月末のことでした。長く生きてくれたのだから、あるいはこれでもう駄目かもと不安に襲われたのですが、そんな状態を3、4回も繰り返したと思ったら、たちまち平常に戻ってしまったのです。何か悪いものでも食べてこんなことになってしまったのか。早速大内先生にお電話で。

「<sup>めす</sup>雌の場合、自然の中にいるものは順調に産卵することができるが、飼育している場合には種々条件的に恵まれないため、そのような形で体外へ

出してしまふ、ということだと思ひますよ」 とのお答を頂き、一つの生理現象ということであればまあまあと、胸をなでおろしたのでした。平成9年6月、同じ症状を再び目前で見ました。この時は少し紫がかった液でした。クロちゃん、狭い所へ閉じ込めてごめんなさい。

## (11) 脱皮の時

ヒキガエルは身体が大きいだけに、皮膚にも厚みがあります。顔や頭の辺りは前肢で交互に取り、口へ運んでいます、背は後肢を背中へ器用に上げ、爪をかけて取ります。全部は食べないで巣の中に落としてあるのを見ます。顔の辺りなど取りきれないで、まだ付いている時は私が取ってやる時があります。そして脱皮が終わると水の中で洗い、艶のいい新しい皮膚に替わります。冬眠中にも目覚めて脱皮していますが、やはり夏期が一番回数多く見られます。

## (12) 記憶力は

夫も畑へ出る時は、やはり虫を入れる器を持って出ます。そして帰宅すると真っ先に表から「ごはん持ってきたよ」と、クロのいる部屋のガラス戸を開けて私を呼びます。それを与えるのはいつも私の役なのですが、そんなことを繰り返すうちに、表で私を呼ぶ夫の声がした時、前肢を縁にかけて、伸び上がって表の方を見ているクロの姿を3～4回見たことがあります。おじさんがここから呼ぶ時は、餌を持ってきてくれた時なのだという記憶があるからだと思っています。

生家の母が来た時のことです。「クロちゃん」などといって手を出した時、一寸頭を振るようにして起こし、力一杯身体を膨らませて威嚇していた形相。その時は私にも気持ち悪いという感じで、日頃見かけない人への警戒心を精一杯表したのでと受け止めたのでした。

### (13) 爪の働き

ここへは登場していませんが、我が家には「ヤンカ息子」と命名されたもう1匹、アズマヒキガエルの雄がいます。彼は我が家の下隣の家のKさんのご主人から貰<sup>もら</sup>い受けたカエルです。

私が畑で草取りをしていたときに、「ギャア」Kさんの庭で叫<sup>け</sup>び声<sup>が</sup>が聞こえました。「どうかしましたか？」怪我<sup>けが</sup>でもされたのでは、と下を見ますと「こんなものがいました」と、怖<sup>こわ</sup>そうに箕<sup>み</sup>の中へカエルを入れて見せてくれました。よく見ればクロと同類のもののようなので、素姓<sup>すじょう</sup>はわかっています。「私に下さい」ということで、我が家に住むことになったのです。平成5年5月24日のことでした。見たところ野生で数年は経ていたかと思われ、その上雄<sup>おす</sup>であるため、クロとは比較にならないほど傍<sup>そば</sup>へ行けばカッと体を怒らせて構<sup>かま</sup>え、凄<sup>すご</sup>味<sup>み</sup>があります。餌<sup>え</sup>の食べ方も驚<sup>おどろ</sup>くほど乱暴<sup>らんぼう</sup>ですばしこいのです。クロとは別の家に住まわせることにしました。

平成9年7月のことでした。朝見ると、蓋<sup>ふた</sup>の網の片隅の方ばかりから巢の外をのぞいています。一寸変だなとは思ったのですが、そのまま畑へ出てしまいました。畑の仕事を終えて御馳走<sup>ごちそう</sup>を持って帰り巢をのぞいて見たところ、「おや？」姿が見えないのです。朝見たとき、彼がのぞいてばかりいた網の部分に穴が開いています。これは大変。椅子の下、棚の陰など探しはしましたが、ちょっとやそっとで見つかるはずはありません。これは夫にも協力して貰<sup>もら</sup>わなくては、と畑にいる夫の方へ行こうとしたとき、和室の廊下のガラス戸を前肢で盛んに引っ掻<sup>か</sup>いている彼の姿を見つけました。彼の方でも目ざとく私を見つけた途端<sup>とたん</sup>に、ガラス戸の引っ掻<sup>か</sup>きを急にやめて、懐<sup>なつ</sup>かしげにじっと私の方を見つめているのです。「どこか見覚えのあるヤツが」とでもいう表情に私には思えたのです。早速外から戸を開けて抱きかかえました。一体どんな状況でここまで来たのだろうか。巢から出られるが、しかし1メートル程度の高さの机上から、どのようにして床に下りたのでしょうか。多分机に続いている椅子を伝<sup>つた</sup>って下りたのだ

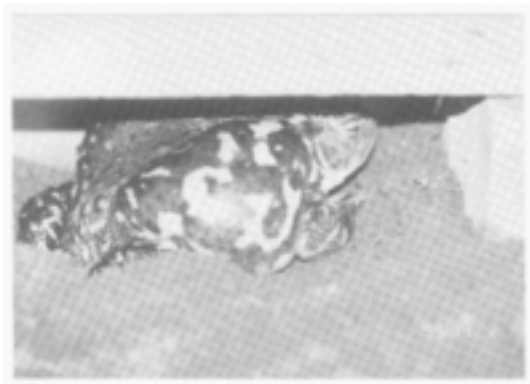
ろうとは思いますが、和室の廊下へ出るまでに長さ2間の廊下があり、突き当たったところに20センチの段差があります。そこをどう上がったか。アマガエルには吸盤きゅうばんがありますが、彼等ヒキガエルには吸盤がない代わりに爪があります。爪をかけて前肢でつかまれば段に届くし、前後肢ありっけ伸ばせば、体長は20センチ以上にはなります。前肢でつかまり後肢でかき上がったに違いないと思うのです。しかし、彼には逃げようという意志があったのではなく、自分の住家の周囲の様子を確かめておきたかったのではないかと。これは私の極めて手前味噌きわて まえみそ的な解釈とは思いますが、そうでなければ、私を見つけた瞬間の彼のほっとしたような「ああよかった」とでもいうような表情など見せるはずはなかったと思うのですが。でも私は巢へ返したとき、大声で一喝いつかつしたのです。「おっかないから、もうお家から出ては駄目よ」と。彼はそのとき目をつむり、頭を引っ込め、肩を落として「うん、うん」とでも言っているように見えました。

#### (14) 冬眠はどのように

巢の中には、直径17～8センチの器にいつも水を入れてあるのですが、最終的には例年その器の下へもぐって春が来るまで眠っています。たまたま器を上げて見ると、頭の位置が少し変わっています、ということは冬眠中でも全く同じ場所にじっとしているわけではなく、少しずつ動いています。しかし、暖かく穏おだやかな日には出てきて、しばらくの間水につかり（体にしっかり水分を吸収しているのだと思います）また戻っていきます。このように本格的な冬眠に入る前、つまり寒さもそれほどきつくない頃（11月、12月）は、巢の中をあちこち移動して、お尻の辺りまで半分ほどもぐってはまた動いています。おなかをすっかり空にしないと冬眠に入らないそうです。冬眠中は土が余り乾きすぎないように、時々霧吹きを使います。

ヒキガエルが冬眠に入るのはアマガエルより早く、春になり日差しが徐

徐に濃く暖かくなってもなかなか起き出しません。冬眠に入るのも遅く、春の目覚めの一番はアマガエルです。



◀写真7

冬眠間近のアズマヒキガエル

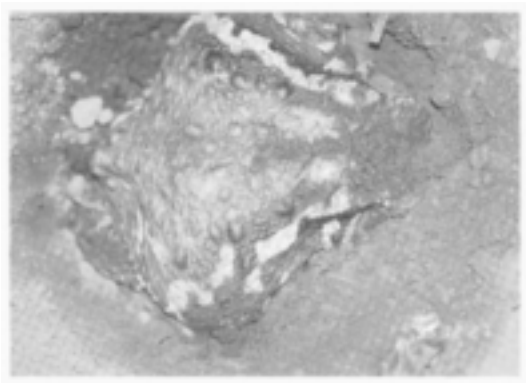
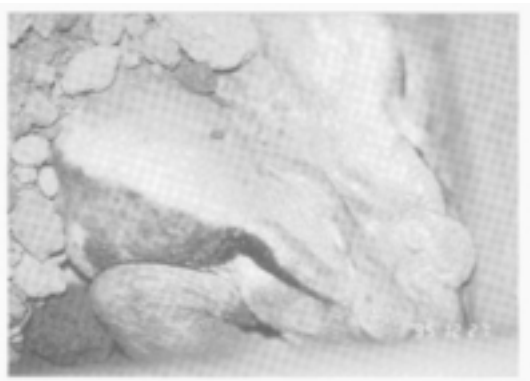


写真8 ▶

水の器の下にもぐり込んでいた冬眠中のアズマヒキガエル



◀写真9

冬眠中のアズマヒキガエル（♂）  
背中の黄色くなめらかな皮ふが特徴

## おわりに

ちょうど2年前、夫が体調を崩して入院して以来、私も少し手助けをしなくてはと、それまで自分ではできないと思っていた小さな耕耘機を見よう見まねで動かすことができるようになりました。私が耕していきますと、小さなカエルたちが懸命に畝<sup>うね</sup>へかき上って逃げようとしています。そんな姿が目に入りますと、機械を止めて安全な場所に逃がしてやります。私をこんな気持ちにさせてくれるのも、カエルたちと暮してきたお蔭だと思っています。

農業をしていて頭を痛めるのはアブラ虫です。梅の木に蔓延<sup>まんえん</sup>して実は種と皮ばかり。ずっと前のことになりますが、東山動物園からコアラの餌であるユーカリにアブラ虫がついて困るが、消毒もならず、どうしたら？との相談を受けた南山大学の答えが、「テントウ虫を放したら」ということだったそうで、テントウ虫の餌はアブラ虫だったのです。夫と飯田からの帰り、一つ手前のバス停から歩いたことがありました。国道の手すりを越えて、土手からヨモギや雑草が歩道へ入り込んでいて、その葉先に見かけたテントウ虫をちり紙に包んで帰り、梅の木に放したことがありました。それ以来、畑にもその姿を見かけるようになり、健康な葉と共につぶらな実をつけてくれるようになり、梅取りの時期が待たれるようになりました。ミミズは土を耕してくれ、カエルは害虫を食べてくれます。このような体験から、自然界の仕組が少しずつ見えてきたような気が致します。農業を始めてから、自然との関わりの深さを改めて考えさせられるようになりました。

地球は母であるといわれ、様々な生命を生み育てます。地球上に住む生物は人間ばかりではありません。私の幼い頃は、家の前を流れる井（水路）の中には、ドジョウ・カジカ・メダカ、そして田んぼにはカエル・トウクロウ・ミズスマシ・子負い虫、また雨上りの川端に群れて歩くサワガ

ニ、つけておいた釜の中のご飯粒を鋏で持ち上げたり、薄紅色の卵を一杯持ったカニ、かわいらしい赤ちゃんが今にもはい出しそうな親ガニなどの姿を驚きの目で眺めたものでした。

初夏、蚊帳<sup>かや</sup>の中を舞うホタルの幻想の光の中にいつしか眠りについた私。秋空に群れ飛ぶトンボ。川べりを飛ぶ1羽のハグロトンボ。動と静の見事なコントラストが私の中に甦<sup>よみがえ</sup>ります。そんな光景が当たり前であった幼かった頃のあの日々。しかし、急速に自然が失われ、過ぎた日々の思い出を包んでいてくれるはずの私達のまわりは大きく変わってきています。目に見えないうちに消えていく動植物があります。一つのものが失われることによって、地上の均衡<sup>きんこう</sup>が崩れていくのではと気になります。様々な生命あるものが関わりあい、共に生きることができればそれは素晴らしいことであり、私の願いであります。「たかがカエル、されどカエル」こんな言葉を下された方があります。長い間、この小さな生き物を見つめることによって、言葉はないけれど私は彼等からいろいろなことを教えられました。そしてまた考えさせられることもたくさんありました。

ご懇切<sup>こんせつ</sup>なご指導、ご助言<sup>たすけご</sup>を賜りました大内一夫先生、我が家のカエルたちの写真を撮<sup>と</sup>って下さった木下進先生に厚く御礼申し上げます。

## 参考文献

世界大百科事典 平凡社 1955年発行

園芸図鑑 福音館書店 1996年発行

昆虫図鑑（『保育社の新ポケット図鑑』のうち） 保育社



山内 祥子（やまうち よしこ）

大正14年下伊那郡山本村（現在の飯田市山本）に生まれる。

主婦 伊那谷自然友の会会員。

カエルと暮して

平成10年 3 月20日 発行

|     |                     |                            |
|-----|---------------------|----------------------------|
| 企 画 | 建 設 省 中 部 地 方 建 設 局 | 長 野 県 駒 ヶ 根 市 上 穂 南 7 - 10 |
| 発 行 | 天 竜 川 上 流 工 事 事 務 所 | 〒399-4114 ☎ 0265-82-3251   |
| 著 者 | 山 内 祥 子             | 長 野 県 飯 田 市 山 本 1512       |
|     |                     | 〒395-0244 ☎ 0265-25-2246   |
| 編 集 | (株)環境アセスメントセンター     | 静 岡 市 清 閑 町 13 番 12 号      |
|     |                     | 〒420-0047 ☎ 0542-55-3650   |
| 印 刷 | 双 葉 印 刷 (有)         | 長 野 県 松 本 市 城 東 2 - 2 - 6  |
|     |                     | 〒390-0807 ☎ 0263-32-2263   |

## 「語りつぐ天竜川」の発刊にあたって

南アルプス、中央アルプスの高峰にはさまれて、伊那谷を北から南へ貫流する天竜川。その流域では、あり余るほどの自然の恩恵に浴して、人々は豊かな暮らしを育んでいます。しかし、名にし負う“暴れ天竜”はひとたび豪雨が見舞えば、日々の穏やかな表情を一変し、猛々しい牙をむき、人々の暮らしを脅かしてきました。

天竜川上流工事事務所では、天竜川が“母なる川”として優しい微笑をたたえ続けて欲しいと願う地域の人々の切なる気持ちに応えるため、半世紀にわたり、地域の人々の多大なご協力のもと自然の脅威と闘いながら河川改修事業や砂防事業に取り組んできました。しかし、まだまだ危険な箇所は多く残されており、絶えず流域の変貌をみつめ、河川管理施設の整備と維持管理を図っていかなければなりません。

また、余暇を求める人々の欲求や環境に対する意識の高まりに伴い、治水、利水の役割だけでなく、貴重な水と緑の空間として人々に潤いを与え、様々な生物の生息・生育環境を形成するものとして、その役割が大きく見直されるとともに、河川が地域の風土と文化を形成する重要な要素であることが再認識され、地域の個性を生かした川づくりが求められています。

そこで、目指すべき21世紀の社会を、災害、水資源、自然環境、地域の個性という四つの視点から「健康で豊かな生活環境と美しい自然環境の調和した安全で個性を育む活力ある社会生活」と位置づけ、洪水や渇水という非日常的現象における被害の軽減対策に加え、日常においても生物などの生息・生育の場であること、散策・スポーツなどの利用の場であること、地域の風土を構成する重要な要素であることを同時に認識し、治水、利水、環境のそれぞれの施策を展開することによる「365日の川づくり」が重要です。

「語りつぐ天竜川」は、こうした考え方に立ち、天竜川に関する地域の知見や経験を収集し、広く地域共有の知識とすることにより、地域の方々に天竜川に対する認識を深めていただき、よりよい天竜川を築いていくことに役立てたいと思い発刊するものです。思い起こせば、昭和61年度の初版を発刊してから早11周年を迎え、今回発刊する2巻を合わせて48巻になります。これも偏に天竜川を愛する地域の方々、その気持ちに応えようとお忙しい中ご協力頂いた執筆者の方々の賜物です。

なお、ご執筆頂いた方々には、自由な立場からお考えを披瀝していただいていますので、建設省の見解とは異なる場合がありますことを付言します。

建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所

所 長 野 田 徹

## 「語りつぐ天竜川」目録

- |                             |             |
|-----------------------------|-------------|
| 1. 伊那谷の気象                   | 米 山 啓 一 著   |
| 2. 天竜川上流域の立地と災害             | 北 澤 秋 司 著   |
| 3. 天竜川に於ける河川計画の歩み           | 鈴 木 徳 行 著   |
| 4. 総合治水の思想                  | 上 條 宏 之 著   |
| 5. 総合治水と森林と                 | 中 野 秀 章 著   |
| 6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷          | 松 澤 武 著     |
| 7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷           | 今 村 真 直 著   |
| 8. 村境は不思議だ                  | 平 沢 清 人 著   |
| 9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷         | 倉 沢 秀 夫 著   |
| 10. 諏訪湖の御神渡り                | 米 山 啓 一 著   |
| 11. 理兵衛堤防                   | 下 平 元 護 著   |
| 12. 近世 天竜川の治水 ― 伊那郡松島村 ―    | 市 川 脩 三 著   |
| 13. 川筋の変遷 ― 天竜川と三峰川の場合 ―    | 唐 沢 和 雄 著   |
| 14. 伊那谷山岳部の降雨特性             | 宮 崎 敏 孝 著   |
| 15. 天竜川の橋                   | 日下部新一著      |
| 16. 伊東伝兵衛と伝兵衛五井             | 北 原 優 美 編   |
| 17. 天竜川の魚や虫たち               | 橋 爪 寿 門 著   |
| 18. 天竜川のホタル                 | 勝 野 重 美 著   |
| 19. 天竜川流域の村々                | 松 澤 武 著     |
| 20. 小渋川水系に生きる ― 人と水と土と木と ―  | 中 村 寿 人 著   |
| 21. ものがたり 理兵衛堤防             | 森 岡 忠 一 著   |
| 22. 量地指南に見る 江戸時代中期の測量術      | 吉 澤 孝 和 著   |
| 23. 土木技術と生物工学 ― 生きものを扱う技術 ― | 亀 山 章 著     |
| 24. 戦国時代の天竜川                | 笹 本 正 治 著   |
| 25. 天竜川の水運                  | 日下部新一著      |
| 26. 惣兵衛川除                   | 市 村 威 人 著   |
| 27. 紙芝居 開墾堤防 ― 下伊那郡豊丘村伴野 ―  | 竹 村 浪 の 人 著 |
| 28. 昭和36年伊那谷大水害の気象          | 奥 田 穰 著     |
| 29. 天竜川の淵伝説 ― 『熊谷家伝記』を中心に ― | 笹 本 正 治 著   |
| 30. 天竜川の源流地帯                | 赤 羽 篤 著     |

- |                              |                       |
|------------------------------|-----------------------|
| 31. 東 天 竜                    | 三 浦 孝 美 共著<br>仁 科 英 明 |
| 32. 天竜河原の開発と石川除              | 塩 沢 仁 治 著             |
| 33. 伊那谷は生きている                | 松 島 信 幸 著             |
| 34. 天竜川の災害伝説                 | 笹 本 正 治 著             |
| 35. 天竜川の災害年表                 | 笹 本 正 治 編             |
| 36. 天竜川水運と樽木                 | 村 瀬 典 章 著             |
| 37. 水辺の環境を守る                 | 桜 井 善 雄 著             |
| 38. 諏訪湖 ― 氾濫の社会史 ―           | 北 原 優 美 著             |
| 39. 河川工作物と魚類の生活              | 中 村 一 雄 著             |
| 40. 天竜川上流域の過疎問題              | 山 口 通 之 著             |
| 41. 資料が語る 天竜川大久保番所           | 松 村 義 也 著             |
| 42. 天竜川上流 河辺の植物と植生           | 関 岡 裕 明 著             |
| 43. 水利開発にみる中世諏訪の信仰と治水        | 藤 森 明 著               |
| 44. 横川山巡覧記 ― 『辰野町資料第87号』より ― | 辰野町教育委員会編<br>赤 羽 篤 校訂 |
| 45. 天龍川の鳥たち                  | 福 与 佐 智 子 著           |
| 46. 遠山川流域の民俗とふるさとイメージの創造     | 浮 葉 正 親 著             |
|                              | (以上既刊)                |
| 47. 田切ものがたり                  | 赤 羽 篤 著               |
| 48. カエルと暮して                  | 山 内 祥 子 著             |
|                              | (発刊中)                 |